

しゅんしよかん
春初感を書す (安積良齋)

やばい
野梅 けいりゆう
溪柳 こころ
心と たが
違い

し
強いて ちようい
朝衣を と
把つて ふうい
布衣に と
換う

ぎんしよく
銀燭 かげ
影 かし
微かにして しゅんえん
春宴 さん
散じ

まんじよう
満城の ふうせつ
風雪 よる
夜 ふこ
深うして かえ
帰る

野梅溪柳與心違 強把朝衣換布衣
銀燭影微春宴散 満城風雪夜深歸

解説 春の初めにふだんから心にもっている感想をのべたもの。

語釈 ※溪柳Ⅱ谷に枝だれる柳。 ※朝衣Ⅱ朝廷で着る衣服。官吏の制服。 ※布衣Ⅱ綿布でこしらえたきもの。官位のないものが着る。 ※銀燭Ⅱ銀の燭台にともした燈火。また明るい燈火。 ※春宴Ⅱ春また正月の宴会。

通釈 野に咲く梅や谷に枝だれる柳を、気ままにめでるといった、肩の張らない民間の生活を終生楽しむつもりでいたのに、官命もた黙しがたく、これまでの布衣を官服にかえ、出でて仕える身とはなった。これまったくわが平生の志とは異なるものである。まことに官界とは窮屈なもので、殿上の明るく輝やく銀燭の灯も薄れ、恒例の春の宴も散じ、城下の街に風雪の舞う中を、夜ふけて帰路につくとは、さてさて因果なことである。